

次の文章を読んで、後の問い(問1～10)に答えなさい。

数年前のことになるが、私は米国人の言語学者T氏と東京で親しくなった。彼はもともとはアメリカ・インディアンの言語を専門に研究していたが、終戦後の日本に、軍人として駐留していたこともあって、最近では日本語の歴史や方言にも興味を示しはじめ、遂に奥さんと三人の娘をつれて東京にやって来たのである。奥さんはイタリア系の人で、小学校の先生をしている。

彼は古い日本家屋を一軒借り、畳に座布団、冬は炬燵に懷炉、そして三人の娘を日本の学校に入れるという、一家あげての見事な日本式生活への **V** ぶりだった。

或る日、アメリカの学者の習慣として、彼は多くの言語学関係の友人知人を、家に招待した。まずイタリア風のイカのおつまみなどで、カクテルを済ませた後、別室で夕飯ということになった。一同が座につくと、テーブルには、肉料理やサラダなどが並べられ、面白いことに、白い御飯がドンブリに盛りつけて出されたのである。

畳の上に座っていること、白い御飯であること、T氏たちが日本式生活を実行していることなどが重なり合って、一瞬私はこの御飯を主食にして、おかずを併せて食べるのだという風に思ったらしい。目の前の肉の皿を取り上げて、隣の人に廻そうとした時、私はT夫人が、かすかにとまどったような気配を感じた。

間違ったかなと思った私は、御飯は肉と一緒に食べるのか、それとも御飯だけで食べるのかと尋ねると、夫人は笑いながら、まずは御飯を食べて下さいと言う。

私はその時、はっと気が付いた。この御飯は、イタリア料理では、マカロニやスパゲッティと同じく、スープに相当する部分なのだとはたして、それは油と香辛料で料理した、一種のピラフのようなもの

思った失敗は、日本の食事文化に存在する或る項目を、別の食事文化の中に見出したため、これを自分の文化に内在する構造に従って位置づけ、

Z 的な価値を与えようとしたことが原因なのであった。

文化の単位をなしている個々の項目(事物や行動)というものは、一つ一つが、他の項目から独立した、それ自体で完結した存在ではなく、他のさまざまな項目との間で、一種の引張り合い、押し合いの対立をしながら、^④ 相対的に価値が決まってくるものである。

自分の文化にある文化項目(たとえば或る種の食物)が、他の文化の中に見出されたからといって、直ちにそれを同じものだと考えることが誤りなのは、その項目に価値(意味)を与える全体の構造が、多くの場合違っているからである。

一般の人は、自分の文化のこのような構造を意識もしないし自覚もしていない。そこで自分の文化に存在する項目が、それ自体絶対的な、^⑤ どこでも通用する価値を持っているように考えがちである。

この点は、ことばという、文化の重要な構成要素を正しく理解するために、極めて大切なことであるから、ことは以外の例を、もう一つだけ取上げよう。

I

以上の二つの例から言えることは、私たちが異った文化に、しかも限られた範囲で接するときは、個々の文化要素を統括する全体の構造がつかめることは稀であり、多くの場合、自分が出会う一部、または特殊な実例を、一般的に拡大してしまう傾向があるということである。しかもこの一般化は、必ず自分の文化の構造に従って行われるということが問題なのである。

私たちが外国語を学習する際にも、いま述べたような具合に、自国語

だった。

食事というのは、いろいろな条件に **W** された、文化という構造体の重要な部分である。何をいつ食べるか、それをどう食べるか、食べていけないものは何かといったことに関して、どの国の食事にも、^③ さまざまな制限や規則が習慣として存在する。

カトリック教徒は金曜日には獣肉を食べないし、イスラム教徒は、豚肉を不浄なものとして決して食べないというようなことは、誰でも知っている有名な事実であろう。

X このように、何かを食べてはいけないという明示的な規則は、外国人にも比較的わかりやすい。ところが自分の国の食物と同じものが、外国の食事の中にありながら、その食物と他の食物との関係が、自国の食事の場合と違うという、**Y** 同一の食物の食事全体における価値が、文化によって異なるときに、難しい問題がおきるのである。

白い米の飯は、日本食の場合には、食事の始めから終わりまで食べられる。というよりは、米飯だけを集中的に食べることは、むしろいけないこととされている。おかずから御飯、御飯からお汁と、あちこち飛び廻らなければ、行儀が良いとは言えないのである。

そこで米の飯と他の食物との、日本食における関係は、並列的・同時的であると言えよう。お汁に始まり、香の物に至るまで、米を食べてよいのである。

ところが、食事の一段階ごとに、一品ずつの食物を片付けていく、通時的展開方式の性格の強い食事文化もある。西洋諸国ではこの傾向が強く、イタリアの食事も例外ではない。ここでは麺類や米の料理などは、ミネストラと称して、本格的な肉料理が始まる前に、済ませてしまうのだ。

私がドンブリに盛られた白い御飯を見て、おかずも一緒に食べようと

の構造を自分ではそれと気づかず、先ず対象に投影して理解するという方法をとりやすい。従っているいろいろと喰違いが生じてくるのも当然である。

(鈴木孝夫「ことばと文化」岩波新書)

問1 空欄 **V**・空欄 **W** に入る語句の組み合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア V 拒否 W 受容
イ V 反応 W 制限
ウ V 順応 W 無視
エ V 適応 W 制約

問2 傍線部①「T夫人が、かすかにとまどった」理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「私」が順序を間違えて料理に手を伸ばしたから。
イ T夫人の目の前に日本式の料理が並んだから。
ウ 「私」の前に見慣れない日本風の料理が出たから。
エ T夫人にとって慣れない畳の部屋だったから。

問3 傍線部②「私はその時、はっと気が付いた」とあるが、どのようなことに気が付いたのか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア この夫人が全く日本を理解していないこと。
イ 御飯から食べてしまったら、おかずがなくなること。
ウ ピラフに見えるものは実はスープであること。
エ 日本風の食事だが外国のコース料理の順序で食べること。

問4 傍線部③「さまざまな制限や規則」とあるが、日本で白いご飯を

食べる際の「制限や規則」とはどのようなものがあると記述されているか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 白米だけ集中的に食べてはいけないこと。
- イ おかずだけで食べなくてはいけないこと。
- ウ 白米はお汁の代わりすること。
- エ 白米は肉料理の前に食べなくてはいけないこと。

問5 空欄 X 空欄 Y に入る語句として適当なものを次

の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。なお、同じ記号は何度使用しても構わない。

- ア つまり
- イ また
- ウ しかも
- エ なぜなら
- オ しかし

問6 空欄 Z に入る漢字二字を本文から書き抜きなさい。

問7 傍線部④「相対的に価値が決まっていく」とはどういうことか。それを説明した次の文の空欄に語句を入れなさい。
なお、a (二字)、b (六字) は本文から書き抜きなさい。

文化の単位をなす項目の一つ一つが、それぞれ他の項目から a として、 b なのではなく、他の項目との関係の中で決まっていく。

問8 傍線部⑤「どこでも通用する価値を持っているように考えがちである」理由を説明した次の文の空欄に入る表現を二十字以内で答えなさい。

異なる文化に接するとき、 から。

問9 空欄 I には次の各一文を並べ替えたものが入る。その順

になるように次のア～カを並べ替えなさい。

- ア つまり頭を下げる挨拶と、握手とを、互いに等しい価値を持つた行動と解釈するわけである。
- イ 出会った人の誰彼かまわず、こちらから握手することは、つまり誤解を生むことにさえないかねない。
- ウ たとえば、こちらが男であって、相手が婦人であるときは、先方が手を出すのを待つことが礼儀とされる国もある。
- エ 日本人が友人知人に出会った時の、一番普通な挨拶は、おじぎである。
- オ ところが、実際には、頭を下げる日本流の挨拶を、日本人同士の間でもよい場合のすべてが、握手で置き換えできるわけではない。
- カ ところが、その日本人が、この頭を下げる挨拶の代りに、西洋人は一般に握手をするということを知ると、誰彼の見さかしく握手をするようになる。

問10 本文の内容に一致するものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 白い御飯だけで食べるのは日本だけである。

イ 外国語の習得には自文化の絶対化が必要がある。

ウ 他の文化を理解するのに自文化が邪魔になることがある。

エ パスタやスープは日本では理解されえないものである。

二

原因不明の病気に冒されたヤンチャを助けるために、同級生の僕(ワタル)、ハム太、ノリオの三人はタイムマシンを製作している。以下はそれに続く場面です。以下の文章を読んで後の問い(問1～12)に答えなさい。

「あとはこれに、頑丈なフタをつければ出来上がりかな」

おばさんが病室を出て行った隙に、ノリオはランドセルから前の日撮った写真を取り出して報告した。

「くそ、早く本物を見たいなあ」

ヤンチャは悔しそうに言った。

僕らから作業の経過を知らされるようになって以来、ヤンチャはずいぶん元氣を取り戻したように見える。咳が出るのも、食欲がないのも、赤くて痛痒いポツポツが出てるのも相変わらずだったけれど、少なくとも気持ちだけはしゃんとしてきたみたいだ。

「いいなあ、オレも一緒に作りたいなあ」

「治ったら、また何だっで一緒にできるよ」

と僕が言うと、

「うん……」ヤンチャは窓に目をやった。「けど、いつになったら治るんだろうな」

窓辺には、きれいに飾りつけられた小さなモミの木が置いてあった。もうすぐクリスマス・イヴ。ヤンチャの入院から、もう四か月がたとうとしている。

「さてはお前、オレたちを信用してないな？」ノリオが、わざと怒った

ようなふりをして言った。「タイムマシン、お前のために作ってやってるんだぞ。あれが完成して、お前の病氣なんかすぐ治る」

「うん。そっだよな」

ヤンチャがにっこりした。その時、

「タイムマシンか……」

聞き覚えのない声に、僕らは慌ててふり返った。

さっきまで横になって寝ていたはずの隣のおじさんが、起きあがって僕らを見ていた。これまで僕らはここへ来た時、おじさんはいてい待合室でたばこを吸っているか、ベッドにいても一言も話したことはなかったのに。

うちの父さんよりだいたいお年上のように見えるその人は、(おじさん)というより(おっちゃん)という感じの人だった。前にヤンチャから聞いたところによると、仕事は大工さんらしい。

でも、その人も今は、やっぱりガリガリにやせてしまっていた。顔や胸に赤い発疹があるのも、しょっちゅう咳をするのもヤンチャと同じだ。「タイムマシン、か」とおっちゃんはもう一度くり返した。「いいなあ。おめえらが作ってんのかい？」

ハム太がノリオを、ノリオは僕を、僕はヤンチャを見た。みんな黙っている。

理由もたぶん一緒だった。「そっだよ」と認めたりしたら、大笑いさそれそうながしたのだ。ヤンチャの前で、あれのことを馬鹿にされるのは我慢ならなかった。というより、怖かった。ヤンチャがどれほどあれを気持ちの支えにしているか、僕らがどんな思いであれを作っているか……大人はどうせわかっちゃくれない。あの晩の父さんがそうだったように。

「関係ないだろ」

とうとう、ノリオが言った。すごくつつけんどんな口調だったのに、「関係なかあねえさ」おっちゃんは怒った様子もなかった。「もしもこの世にタイムマシンなんてもんがあるんなら、一番先に乗せてもらいてえからね」

「一番はヤンチャだよ」

つるつと口をすべらせたハム太を、ノリオと僕が両側からこづく。

「なら二番目でもいいやね」

と、おっちゃんは言った。少し笑ってはいたが、馬鹿にしているふうではなかった。

僕は思い切って訊いてみた。

③「どうしてタイムマシンに乗りたいの？」

ノリオが袖を引っぱるのがわかったけれど、無視して続ける。

「やっぱり、未来の世界へ行つて病気を治したいから？」

「いんや」と、おっちゃんは言った。「そんな見たこともねえようなことなんざ行きたかねえね。俺が行くとしたら、過去のほうさ。そうさな、二十年か三十年くれえ前の世界へ、ひょいっと飛べたらありがてえね」

「さん・じゅう・ねん？」とノリオ。「そんな大昔へ行つて、いったい何をしようっていうのさ」

「何をつて、おめえ……そりや、いろいろやり直せるんじゃないかと思つてよ」

そう言つて、おっちゃんは苦笑いしながら窓の外を見やつた。やり直したいことがいっぱいあるのかな、と僕は思った。

「それよか、いつそのこと、怒鳴りこんでやるつてのもいいな」とおっちゃんは言った。

「三十年後の世界が、どれつくれえひでえことになつてるか、連中に思い知らせてやるのさ。』どうしてくれんだ、てめえらが好き勝手にして」

なイライラや割り切れなさをわかつてもらえらるだろう。

なんだか、夢の中で正体の見えないものに追いかけてられている時のようだった。焦れば焦るほど、思うことがうまく言葉にできなくて

A。そのへんに落ちていいる石を片っ端から拾つて、めつたやたらに投げつけたくなる。

僕は、大きく深呼吸した。

真冬だというのに、風はいつもよりなまぬるく、ドブの臭いがきつく感じられた。

立ち止まつて土手から下を見る。曇り空のもと、川はよどんでのつぺりと平べったく見え、汚い泥の色ばかりが目立っていた。

そういうえば、ずっと前に父さんから聞いたことがある。父さんたちが子供の頃は、この川の水がそのまま飲めたのだそうさ。でっかい魚もいっぱいいて、時には釣つて食べたりしたのだそうさ。

もしもこの世に本物のタイムマシンがあつて、せっかく未来に行けたとしても、未来の世界は今よりもっと汚くなつてるんじゃないだろうか。ヤンチャのような病氣だつて、もつともつと沢山の人の広がってしまったていて、病氣じゃない人を見つけるほうが難しいくらいじゃないだろうか……。

⑥僕にはそれが、ただの「クウソウヘキ」だとは思えなかった。

僕らのタイムマシンが完成したのは、クリスマス・イヴの前の日のことだった。

できあがつたタイムマシンに、僕らは大きなリボンをかけて、記念撮影をした。三人でいつせいに、

「はっしーん」

と叫んでいる瞬間の写真だ。

W

タイムマシン本体を病院まで運んでいくことはできないけれど、せめ

④れたせいで俺らが尻拭いさせられてんだぞ』ってね」

〈尻拭い〉

僕は口の中でつぶやいた。

——しりぬぐい。

「そ……そりやないよ」ハム太が言った。「だってさ、そんなのつてフコ……ええと、不公平じゃないか」

するとおっちゃんは窓から僕らに目を移して、へつと頬をゆがめた。

「そうさな。そりや、おめえらの言う通りなんだろうけどよ。ただ、このごろ俺あ思うようになったよ。『不公平』つてのはもしかして、『人生』つてやつ別の呼び方なんじゃないかねえかってね。へへっ、こりや我ながら名文句だ」

「そこそと布団をたくしあげ、しんどそうに横になると、おっちゃん」は低くかすれた声で言った。

「ま、気にすんな。おめえらには、まだわかんなくていいこつたよ」

学校と病院と家とを結ぶこの道を、もう何回通つたことだろう。

(なんだか、時代劇でみたお百度参りみたいだな)

河原の土手を歩きながら、僕は思った。何度も何度もくり返し通うことで、神様の思いが通じてヤンチャが退院できるのだとしたら、お百度どころか、五百度だつて千度だつて通つてみせるのに。

病院からの帰り道、僕はノリオとハム太に、この間のテレビの話をしようとした。さつきおっちゃんが「尻拭い」と言うのを聞いたなら、なぜかあの教授の話を思い出して、ついでにあの時のいやな気持ちまで思い出してしまったからだ。

でも、何から話せばいいのかわからなかった。

いったいどう言えば、今のこの、胸の奥へ奥へと食いこんでいくよう

写真だけでも、ヤンチャへのクリスマス・プレゼントにするつもりだった。

二日ぶりに会うヤンチャに早く写真を見せてやりたくて、僕らは秘密基地から病院までヨイドンをした。ヤンチャがいたらダントツで一番だったろうけれど、僕とノリオはいい勝負だった。見えないくらい後ろから、ハム太がぜいぜいのどを鳴らして追いかけてきた。

X

息を切らしたままヤンチャの病室にかけ込むと、窓際のヤンチャのベッドはきちんと整頓されて、誰も寝ていなかった。

一瞬、部屋を間違えたのかと思った。でも、右側のおじいさんたちも、ヤンチャの隣のおっちゃんも、確かに同じ顔ぶれだ。

Y

「……ヤンチャは？」

と、僕は言った。自分の声が、どこか遠くから聞こえるような気がした。

やつと追いついてきたハム太が、空のベッドを見て、

「あれ、ヤンチャのやつ、退院したのか？」

と言った。

おっちゃんは黙つて僕らを見た。

Z

それから、ゆつくりと首を横に振った。

「そ……んな……」

(信じない、そんなこと絶対に信じないぞ)

思うのに、勝手に口が動く。

「……いつ？」

「今朝だよ」と、おっちゃんは言った。「明け方、ひどい発作を起こしてね。あのやろ、ずいぶん頑張ったけど——だめだった」

僕は、じりじり後ずさりした。からっぽのヤンチャのベッドに背中を向けたが最後、何もかもが本当のことになってしまう気がした。

と、ノリオが突然ウツと変な声をもらし、そのまま廊下を走り出した。
「待てよ!」

ハム太が後を追う。ばたばたと遠ざかっていく足音を聞きながら、おっちゃん達は僕の顔をじつと見て口元をゆがめ、とても静かに言った。

「間に合わなかったな。おめえらのタイムマシン」
そのとたん、我慢が限界にきた。僕は二人を追いかけて病院の外へ飛び出した。

たったいま笑いながら走ってきたばかりの土手の道を、僕らはうつむいて歩いた。涙でまわりのものがみんなばやけ、道端の小さな石ころに何度も蹴つまずいた。

悔しかった。こんな仕打ちがあつてたまるかと思つた。どうしても納得できなかった。ヤンチャのやつにしたって、あんまり水くさすぎる。おととい会つた時は普通に話していたのに、なんでこんなに急にいつてしまうんだ。なんで僕らに一言のあいさつもなく消えたりできるんだ。ひどいじゃないか。あんまりじゃないか。

これからどうすればいいのか、自分では何も考えられなかった。先に立つて早足でどんどん歩いていくノリオの後を、よろよろと追いかける。たどりついた先は、やっぱり秘密基地だった。裏口から入るなり、ノリオはセーターの袖口で顔をぬぐって、結んであつたリボンを荒々しくほどいた。

「おい、何する気だよ」
とハム太。

フタを引き開けながら、ノリオは振り向きもせずと言つた。

「きまつてるだろ。これは何だよ。オレたち、何を作つたんだよ」

「え……えええっ?」ハム太の声が裏返つた。「け、けど、こんなもんが今さら何の役に立つのさ」

注

※1 この間のテレビの話……ニュース番組で大学教授が近年の地球環境の激変によつてヤンチャが

患っているような病気が生まれたと発言していたこと。

問1 傍線部①「わざと怒つたようふりをして」とありますが、ノリオがそうしたのはなぜですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア タイムマシンの完成を信じていないヤンチャに不満を持ったため。

イ 入院が長引き、治療を不安視しているヤンチャを元気づけたため。

ウ タイムマシン製作など不可能なことをヤンチャに知られないため。

エ タイムマシン完成に全てを懸けているヤンチャを情けなく思つたため。

問2 傍線部②「怖かった」のはなぜですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ヤンチャも僕らもタイムマシン製作にヤンチャの病氣治療の望みを託しているから。

イ 子供だけで訳の分からない機械を作っていることをとがめられると思つたから。

ウ タイムマシンの作り方など分からないことをヤンチャに知られてしまうから。

ノリオが黙つて中に入る。

「おい、ノリオつてば!」ハム太は必死になつて言つた。「たとえこれが本物だつたとしたつてき、ヤンチャはもう……もう、いないんだぜ? 未来から誰を連れてきたつて手遅れじゃないか」

「そんなことない!」ノリオは怒鳴つた。「今日より前の世界に戻つてくればいいんだから」

「何言つてんだよ、さっぱりわかんないよ」ハム太が泣き声を出す。「ちゃんと説明してくれよ」

「だからーヤンチャが死にまうより前の世界に戻つてくればいいんだ。そうすれば、ヤンチャにはもう一度チャンスがある。もしかしたら今度は死なないですむかもしれないじゃないか」

「そうか!」

思わず叫んだ僕の声に、ハム太がびくつとなる。

「そうだよ、何もわざわざ『今日』めがけて戻つてこなくてもいいんだ! 『昨日』にだつて、その前にだつて、ヤンチャが元気な頃や、僕らが赤ん坊の頃にだつて、好きな日や好きな時間をめがけて戻つてくることができるんだ。なんたつて……なんたつてこれはタイムマシンなんだからな!」

⑨「何言つてんだよ、おい、落ち着けよ。どうしちゃつたんだよ! 一人とも」ハム太がおろおろと止めるのもきかずに、ノリオはぱたんとフタを開めてしまつた。

くぐもつた声の中から叫ぶ。

「こげよ、ワタル!」

その時にはもう、僕は自転車に飛び乗つていた、スタンドを立てたまの自転車のペダルを踏み込む。力いっぱいこぐ。

(村山由佳『約束』集英社)

エ タイムマシンのことを学校や親に報告され、製作がストップすることがいやだつたから。

問3 傍線部③「ノリオが袖を引っぱるのがわかつたけれど、無視して続ける」とありますが、なぜ無視して続けたのですか。理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア「おっちゃん」がタイムマシンのことを知つてしまつたので、これ以上関わらせないようにしたかつたから。

イ「おっちゃん」がタイムマシンのことを信じているわけがないので、どういふつもりか探りを入れてみようと思つたから。

ウ「おっちゃん」がタイムマシンのことを疑つていないので、本当にタイムマシンが製作できるのか聞きたかつたから。

エ「おっちゃん」がタイムマシンのことを馬鹿にしているようなので、タイムマシンに乗りた理由を知りたかつたから。

問4 傍線部④「俺らが尻拭いさせられてんだぞ」とありますが、どういつたことか、「三十年前の人たち」、「環境」という言葉を用いて四十字以内で答えなさい。

問5

傍線部⑤「不公平」つてのはもしかして、『人生』つてやつ別の呼び方なんじゃねえかつてね」とありますが、どういふことですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人生を「不公平」だという有名な台詞があること。

イ 人生を辞書で引くと「不公平」と記載されていること。

ウ 人生では一部の人に良いことや悪いことが起こること。

エ 人生では人間に等しく良くないことが起こること。

問6 空欄 A に入る語句として、最も適當なものを次の中から

- 一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 一泡吹かせたくなる。
- イ 地団駄を踏みたくなくなる。
- ウ 白い目で見たくなる。
- エ 手塩にかけたくなる。

問7 傍線部⑥「僕にはそれが、ただのヘクソウヘキ」だとは思えな

- かった」とありますが、どういうことですか。最も適當なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 未来の世界が今よりは汚くなっているだろうということ。
- イ 未来の世界が今より汚くなっている可能性がありうること。
- ウ 本物のタイムマシンを作ることが現実には可能だということ。
- エ 空想をするより現実世界で問題を解決すべきだということ。

問8 以下の文は空欄 W・空欄 X・空欄 Y・空

欄 Z のどこに入るか。記号で答えなさい。

首筋の毛が、全部逆立つ。

問9 傍線部⑦「水くさすぎる」とありますが「水くさい」の意味とし

- て、最も適當なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 他人行儀だ。
- イ 不愉快だ。
- ウ 哀れだ。
- エ 不運だ。

問10 傍線部⑧「よろよろ」とありますが、こういった語をなんと言い

- ますか。最も適當なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 擬態語
- イ 擬人法
- ウ 隠喩
- エ 表音文字

問11 傍線部⑨「ハム太がおろおろ」とありますがハム太はなぜ「お

- ろおろ」しているのですか。最も適當なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア タイムマシンなど実現不可能と分かっているはずの二人が、タイムマシンを本気で動かそうとしているから。
- イ タイムマシンが未完成であるのに無理に作動させれば、事故が起こりかねないと思ったから。
- ウ この世にいないヤンチャをタイムマシンで未来に連れて行くつもりでいる二人に不快感を抱いたから。
- エ 「昨日」に戻る装置がこのタイムマシンにないことをふと思いついたから。

問12 本文の内容として最も適當なものを次の中から一つ選び、記号で

- 答えなさい。
- ア ヤンチャはタイムマシンで未来の世界に行くことを夢見ていた。
- イ ノリオはヤンチャの死を自分の責任だと感じていた。
- ウ ハム太はタイムマシン製作を馬鹿馬鹿しいと感じていた。
- エ 僕（ワタル）はヤンチャの死に理不尽なものを感じていた。

三

次の各問い（問1～4）に答えなさい。

問1 次の傍線部の読みを書きなさい。

- ① 乳歯が生えそろう。
- ② 用意万端ととのう。
- ③ 枚挙にいとまがない。
- ④ 大根を短冊に切る。

問2 次の傍線部を漢字に直しなさい。

- ① 不安をジヨチヨウする。
- ② 資金がジユンタクだ。
- ③ 休日もソウギョウする。
- ④ カイテキな住環境。

問3 次のことわざ、慣用句を完成させなさい（漢字一字を書くこと）。

- ① 血は□よりも濃い（血縁の者のつながりは他人よりも強い）
- ② □い物には巻かれろ（権力のある者には服従するのがよい）
- ③ □を洗う（よくない社会から抜け出る）
- ④ □の歩み（進みぐあいの遅いたとえ）

問4 次の語の部首をひらがなで答えなさい。

- ① 快
- ② 切
- ③ 家
- ④ 広

平成三十一年度

狭山ヶ丘高等学校付属中学校

入学試験問題

国語

解答用紙

(二月十二日実施)

【解答用紙記入上の注意】

- 一、文字ははつきりと、ていねいに書くこと。
- 二、漢字の書き取りはトメ、ハネに注意すること。
- 三、字数制限のある問いは、その指示に従って書くこと。

受験番号

氏名

点

一

問 1

問 2

問 3

問 4

問 5

X

Y

問 6

問 7

a

b

問 8

問 9



問 10

から。

二

問 1

問 2

問 3

問 4

問 5

問 6

問 7

問 8

問 9

問 10

問 11

問 12

三

問 1

①

②

③

④

問 2

①

②

③

④

問 3

①

②

③

④

問 4

①

②

③

④